

# 第三者機関による 審査の未来



**これまでの20年間、認証機関（CB）は、食品基準への適合に関する企業のコミットメントをサポートするコストセンターから、食品サプライチェーン全体に対して測定可能なベネフィットをもたらす組織へと、そのイメージを変えてきました。**

今や認証機関の商品は、認証のための認証にとどまらず、プロセスの改良やブランドの保護、さらには、今日の安全で持続可能な業務慣行の基盤となる継続的改善戦略と関連したものになっています。

しかし、顧客の意見に耳を傾けると、認証機関が現状以上のものを提供する必要があることがわかります。第三者機関による審査の将来のカギを握るのは専門化であり、具体的には、テクノロジーを使用して審査員の役割を利用者にとってより負担が少なく費用効率の高いものにすること、そして審査員が集める膨大なデータのより適切な使用方法を見つけることが求められています。

簡潔に言えば、ブランド志向の食品小売会社や製造会社は、第三者機関による安全性認証と品質認証が、知識や意識を高めていく消費者市場への食品供給のライセンス以上のものであってほしいと希望しています。

とはいえ、基本的規格に照らして企業の認証を行う技能を持つ信頼できる第三者機関であることには、これからも変わらぬ価値があります。また、消費者にとっての食品のリスクを減らすために対処できる不適合を特定できる能力は、今後も引き続き重要です。

認証機関にとっては、これからも基盤となる業務は成長していくと思われませんが、一方で、特にトップクラスの機関については、他の機関との差別化はますます難しくなっています。

この難しさの要因は、すべての認証機関が、同一の業界食品規格に基づいて同じ資産クラスやプロセスや製品を認定していることにあります。そして認証の原則自体が、その設計上、差別化を難しくします。

認証の原則においては、食品安全規格への遵守が業界内での競争優位性につながってはならないと認識されており、ある大手の食品生産者が別の生産者よりも安全であるような認証は望ましくないと考えられています。一方で消費者は、立地やプロセスや商品に関わりなく、一貫して高いレベルの安全性を求めています。

では、認証機関はどのようにして、競合機関との差別化を実現し、基本的規格に関する認証を、必然的に起きる底辺への価格競争を回避しながら行うことができるのでしょうか？

1つの方法は教育研修であり、認証を支持する主要な組織においても教育研修の採用が増加しています。標準化が普及している業種とはいえ、食品業界では、会計審査のような、食品審査員の教育研修のための普遍的な試験は存在しません。このことは、認証機関にとっての差別化のチャンスとなります。

トップクラスの食品生産会社は、独立審査機関に対して、マネジメントシステムに関する十分な実務知識以上のこと、すなわち深い知識と専門性を有することを期待しています。

LRQAのような食品セクターにおけるスペシャリストとみなされるには、審査員は、システムについての広範な知識と、特定の食品タイプやプロセスあるいはその他の生産上のリスク（アレルギー原因物質の混入、汚染、ラベリングなど）に関する戦略的専門性とを組み合わせた教育研修を受ける必要があります。

柔軟でターゲットを絞った教育研修戦略は、食品産業からの変化する需要に対応できるスペシャリストの集団を構築するための基盤であり、他の認証機関との差別化要因としても機能します。

テクノロジーとデジタル化の留まることのない進化もまた、第三者機関による審査の将来にとって大きな可能性をもたらします。

遠隔検査が食品チェーンの安全性を損なうことなく審査コストを引き下げる可能性については、すでに多くの報告がなされています。ただし、これを裏付ける積極的な試験調査はほとんどなく、実際の進歩と可能性とを区別するのは難しい場合があります。明らかなのは、主要な食料生産会社は上流のサプライヤーの可視性の向上を必要としており、これを実現できるテクノロジーが存在するということです。

上流における可視性が求められているのは、安全上の理由だけによるものではありません。モノのインターネット（Internet of Things: IoT）によって力を得た意識の高い消費者は、自分たちの消費する食品が、社会的に責任のあるサプライチェーンから供給されているという証拠をますます要求するようになっています。いわば彼らは、その商品がどこから調達されたのか、そしてどのような条件で製造または収穫されたのかを知りたいと考えています。

世界の食品メーカーにとって、スマートグラスのようなウェアラブル技術は解決策となる可能性があります。食品安全に関する研修を受けていないオペレーターでも、スマートグラスを着用することで離れた認証現場で基本的な審査を実施できる可能性があり、一方、研修を受けた審査員が、世界の他の地域にあるオフィスからオーディオビデオフィードを利用してスマートグラス着用者と通信したりプロセスを指揮したりすることも可能です。

こうしたウェアラブルテクノロジーの利用を支持する人は、旅費の節約だけでも意義があると考えますが、研修を受ける側にとってのライブトレーニングの質的なメリットも考慮すべきです。またスマートグラスに承認済みの工場のルーチン作業を組み込んで、生産ラインで安全上重要な作業を行う従業員がリアルタイムで指示を受けるようにすることもできます。

例えば、機器のQRコードをスキャンして操作方法についての視覚的なガイダンスを見る、あるいは生産ラインの変更などのタスクについての参照マニュアルや手順書をダウンロードして、交差汚染の可能性を低減させるといった使い方も考えられます。

スマートグラスにはデータ収集をサポートし強化する能力もあるため、先行してこれを導入する認証機関は、競争上の優位性を得ることもできます。一般的にデジタル化には、認証ビジネスにとって有望な将来性があります。

大半の認証機関、特に世界的に展開する機関は、大量のデータを生成し保存していますが、このデータがもたらしうるポテンシャルは完全には認識されていません。認証機関の審査員は、業界のフードチェーンのリンクにあたる部分をすべて検査しますが、現在のところ、生成されたデータを十分に活用していないのです。

クライアントは、認証機関が収集した管理情報を利用して、業界のベンチマーク、比較によるGAP分析、企業のビジネス管理の改善策に関する基本レポートなど、より優れたビジネスインテリジェンスを生み出すことを期待しています。

次に行うべきステップは、予測分析です。複数の販路を持つ食品製造・小売チェーンの審査は、比較的費用がかかる、資源集約的な活動です。

認証機関が保有するデータには、審査員が最もリスクの高い場所をターゲットにできるようなインテリジェンスを提供することによって、こうした審査活動をシンプル化できるポテンシャルがあります。さらに、カレンダーベースの検査体制を、本質的にコスト削減を伴う条件ベースの体制へと変更することも考えられます。

さらに一歩進めて、情報を匿名化して、業界動向に関するインテリジェンスを生み出すデータバンクに一元的に保存することも可能です。そうすることで、例えば東欧の生産工場での共通生産プロセスで汚染率が高くなり始めたら、他の地域の生産工場も潜在的な脅威を認識することが可能となります。

現在では、保有する業界データを活用できる体制を構築している認証機関はほとんどありません。理由の一つとして、予測分析に移行するには、大半の機関でそれまでとは全く異なる組織としてのスキルセットが必要になることが挙げられます。すなわち、食品およびシステムの専門家、データアナリストやデータサイエンティストと共同で作業することが求められるのです。

ビッグデータが普及し、技術の進化が拡大する時代において、食品チェーンの健全性をサポートするより良い方法を見つけられるかどうかは独立食品安全機関の将来がかかっているという事実は見失われがちです。

業界規格に関するガイダンスであれ、安全な慣行や品質維持、持続可能性、企業の社会的責任、またはデータ駆動型インテリジェンスであれ、将来の審査機関はリスクベースのシステムを用いてそうした解決策を見つけることとなります。

第三者審査の将来において重要なのは、リアルタイムの保証の提供であり、そして解決策は、必ずしも認証であるとは限らないのです。



**Jan Kranghand**

サービスデリバリー担当グローバル主任  
LRQA



LRQA

YOUR FUTURE. OUR FOCUS.

## LRQAについて

認証、ブランド認証、食品安全、サイバーセキュリティ、インスペクション、教育研修分野の比類なき専門知識を結集することにより、当社は世界的な認証のリーディングプロバイダーの地位を確保しています。

その伝統は誇るべきものですが、顧客との今後のパートナー関係を構築する上で、本当に重要なのは現在の当社の姿です。揺るぎない価値、リスク管理・軽減における数十年の経験、未来への的確なフォーカスを組み合わせることで、より安心・安全・持続可能なビジネス構築に向けてお客様をいつでも支援します。

独立した審査・認証・教育研修から、技術アドバイザリーサービス、リアルタイムの認証技術、データによるサプライチェーン改革まで。当社の革新的なエンドツーエンドのソリューションが、変化の速いリスク環境に積極的に対処できるようお客様をサポートします。つまり、未来の状況を成り行きに任せるのではなく、お客様が自ら構築できるようになるのです。

## お問い合わせ

URL : <https://www.lrqa.com/jp>



## LRQA リミテッド

〒220-6010  
横浜市西区みなとみらい2-3-1  
クイーンズタワーA10階

本書に示すすべての情報が正確かつ最新であるように、LRQAでは細心の注意を払っています。ただし、情報の不正確さや変更について、当社は一切の責任を負いません。

Care is taken to ensure that all information provided is accurate and up to date; however, LRQA accepts no responsibility for inaccuracies in or changes to information.  
For more information on LRQA, click here (<https://www.lrqa.com/entities>)  
© LRQA Group Limited 2021